2006. 11. 28

「蔵と運河の街」　半田　を歩く

11 月 28 日暖かな陽射しに誘われるように、赤レンガや運河の街並みと紺屋海道めぐりに出かけた。

市役所でガイドマップをもらうも.....

事前に駐車場を調べるも地図には載っていないので、市役所に寄ってガイドマップをもらってスタートすることにした。
2F の観光課に行くと背の高い女性が先客にいたがすぐ帰った。散策マップはありますかと聞くと、すぐ市内の散策マップと半田の地図をだしてもらえた。しかし、散策マップは文字が小さいので妻に渡して、結局は持ってきた市役所のホームページから印刷した蔵浪漫コースのマップを基に歩くことにした。
でもこれが間違いの元になるとは知る由もなかった。車はそのまま市役所に停めてスタートした。まずは半田運河を渡り酢の里博物館を左手に見ながら蔵の街広場を通る、とそこには散策者用の仮の駐車場が用意されていた。でもそのことが市のホームページに載っていないのは何故だろう?? せっかく駐車場を用意していても、これでは利用者が少ないのではないか。あるいは駐車場がないからと出かけるのをためらうだろう。
それも街の一等地のスペースを割いているのだから、有効に活用されなくては何のための施策かと言いたくなる。

風雪に耐えて 130 年の小栗家住宅

と言いながら蔵の街広場を右折すると、趣のある立派な木造の家がある。半田市観光協会とマンサンの二つの看板が並んでいる。隣にはこの家の説明板があった。3 年をかけて明治 3 年に造られた小栗家本宅で、平成 5 年半田市都市景観賞になった建物だ。店舗部分は文政 11 年(1821)から萬三商店として、肥料、雑穀(主に大豆)などの卸商として使用された。
この小栗家は、慶長の備前検地(尾張藩の検地)のときに、検地の村方立会人として小栗三郎左衛門(萬三の先祖)がその名を連ねています。元禄 8 年(1695)に始まり、宝永 2 年(1705)に完成した山方新田の干拓は、この下半田の豪商小栗七衛門と小栗三郎左衛門の出資によって開発されています。その後も小栗家は醸造業と運送業で栄えたのです。

二つの看板がかかる小栗家の本宅

明治末期では独占的に肥料を扱って、近畿、関東、東北にまで販路を持ち大正2年(1913)の販売額は当時300万円にもなったといいます。(小栗家については市野忠士著「半田十話ものがたり」より引用)中は少し薄暗いが太い木が使われて立派な家ということが分かる。今は観光協会の事務所として使用されているのがすばらしい。

下町どおりを行くと右手に長い壁が続く中埜半六邸がある、ここは年に数回一般公開される。いつだったかのひな祭りの際には中を見ることが出来たが、今回は素通りする。その隣の酒の文化館もすでに見学したので今回はパスして紺屋海道をめざす。

紺屋海道はどこに

酒の文化館前を左折してすぐ業葉神社があり、隣には知多四国19番札所の光照院がある。お堂の前の銀杏が黄色に色づき美しい。でも寺名がどこにも書いてない、おかしいと思いながら行くと立派な門が建っていた。
少し離れた所にお堂があったのだ。その先を右折し商工会議所のところを左折して、しばらく行くと和食の「徳良」がある。この店は以前家族で寄って、人数分の材料がないからと断られた店だ。だから忘れられない店である。
その隣にはJR武豊線が走っている、踏切を渡り並行する道路も渡って紺屋海道に入る。ここからは、南吉の歩いた紺屋海道界隈之図を見ながら行くことにする。少し行けば昔ながらの手焼きのおせんべい屋「米市商店」があるはずである。しかし、右に大きくカーブするあたりに来てもお店がない。
おかしいなと思いながら進むと、トーカヒルズを過ぎて龍台院の見える所まできていた。道が違うことが確信できたので、妻に市役所でもらってきた文字の小さいマップを見てもらう。
すでに通り過ぎて一本奥の通りまできていることが分かった。やむを得ず来た道をもどることに。マップの道筋から次の三叉路とめぼしをつけて戻ると、そこには「紺屋海道」の案内板がこちら側からしか見えない位置に取り付けられ

ていた。周りを見渡したがそれ以外に案内板はなかった、どちらから来ても分かるようにして欲しいものだ。

手焼きせんべいを味わう

　しばらく進むとギャラリーはなくら.うさぎ屋の看板のついた、黒い板塀の家がある。大八車の車輪が置かれ和の趣がとてもよい、その前には右紺屋海道の案内もあった。案内に沿って進むと黒い板塀の蔵が続き、その先に手焼きせんべいの米市商店がある。
明治８年創業の看板に誘われて中に入ってみる、右側に小さなベンチが置かれその前に紺屋海道と手焼きせんべいのパンフレットが並んでいた。
左側には塩味や、しょうゆ味のせんべいが袋詰めにして並べられている。その光景が近代的な明るさとは違う、日本の伝統的な美しさを彷彿とさせてくれる。そんなお店でとても感じが良い、試食の味も良く気に入ったので、しょうゆ味と詰め合わせの２袋を買った。１袋 500 円はかなり高いと思うが旅の思いでになる逸品である。

手焼きせんべいの店「米市商店」

紺屋海道の秋葉社

南吉も歩いた紺屋海道

　友の書いた半田十話ものがたりで一通りは承知していたが、いただいたパンフレット「紺屋海道探検」ではこんな説明がある。
紺屋海道とは
　半田市堀崎町周辺、上半田(かみはんだ)と呼ばれるこの界隈にあるのが紺屋海道。名前の由来については船の帆を染めた染物屋が数件あったことからつけられたと伝えられている。
江戸時代の上半田(坂田郷)のメイン通りであったこの道は、半田港が開かれるまでは、千石船の出入りする常滑の大野港と下半田を結ぶ交通の要所であった。

地元では紺屋海道の名が語り継がれていますが、歴史資料にはその名の痕跡が見つかっていないという。

新美南吉も歩いた道

「ごんぎつね」「手袋を買いに」で知られる半田市出身の童話作家、新美南吉はこの道に縁のある一人です。

南吉は結核の治療のため、半田の町一番の名医と言われた丹羽医院(半田駅構内の西側の側道に沿って大きな森があり、その一角にあった)に通院していました。南吉は丹羽医院の看護婦さんの一人に好意をいだき、紺屋海道を通り住吉神社の森の小道を 2 人で一緒に歩いたという話が残っています。また、当時教師をしていた南吉は、勤務先の安城女学校へ通うため、現在の JR 半田駅に行く時や、行きつけの喫茶店「カガシヤ」(現在も営業)にコーヒーを飲みに行く時、同盟書林に本を買いに行く時などもこの紺屋海道を歩いたようです。

赤レンガの建物はビール工場

手焼きせんべいの店から、赤レンガの建物まで行く間に二つの秋葉社があった。そこには紺屋海道の文字が見られる。ここに秋葉社ができたのは明和 3 年(1766)正月 20 日に、亀崎村の米商人お島のわらぶき家から出火して村の大半を焼き尽くす大火があった。それ以降上半田の住民に防火意識が高まり、4 箇所に秋葉社を建てたといわれる。

赤レンガの建物

ステンドグラスも見える

その内の 2 箇所が紺屋海道に残されている、160 年余続く地元の大切な文化財でありいつまでも残したいものだ。

そんな道を行くと国道 247 にぶつかり赤レンガの建物の前に出た。歩道橋を渡り赤レンガの建物の前に立つ。そばに来てじっくり眺めるのは初めてである、なかなか大きな建物だ。所々レンガの剥がれている所も見える。ぐるりと一回りしてみたが、高い塔の部分にはステンドグラスが使われている。なんと洒落た工場なんだろう、パンフレットにはこんな説明が.....

すばらしい建物だ

郷土産業の遺構

明治 31 年(1898)丸三麦酒株式会社のビール工場として誕生し、「カブトビール」というビールを全国に送り出しました。すでにアサヒ、サッポロがほとんどのシェアーを占めていた時代に、地方都市. 半田から果敢に挑戦を仕掛けたのです。

建築物としての遺跡

この建物を設計したのは、東京駅や日銀本店の設計で知られる辰野金吾旧赤坂離宮の片山東熊と並び、明治建築界の三巨頭の一人といわれた妻木頼黄(つまき　よりなか)です。

ビール製造には安定した温度と湿度が必要で、この建物は 2 重～3 重の空気層を有する壁や、多重アーチ床(断熱耐火床)など室全体が外気から断熱された構造になっています。

カブトビールのその後

社名変更を繰り返した後、昭和 8 年当時 80%のシェアーを占めていた大日本麦酒に吸収されました。カブトビールの製造は第二次世界大戦中に途絶えます。その後大日本麦酒は、サッポロビールとアサヒビールに分離していきます。

いつぞやの家族食事会でカブトビールをいただいたが、やや辛口だったような記憶がある。また、安全のため現在は常時公開されていないが早く常時公開されることを期待したいものだ。

旧中埜家の別荘 T`s C A F E

次に赤レンガから名鉄知多半田駅を目指した。そして途中にある紅茶専門店のカフェ、旧中埜家別荘でホットタイムにするつもり。
地域の全体図が分かっていないので、紺屋海道を戻り途中からトーカヒルズを目安にして移動した。知多半田駅前の通りに出ても、それらしい洋風の建物が見えない。でも少し歩いたらあった、周りに少し大きな建物があるだけで覆い隠されてしまうのだ。

中埜家の別荘だったカフェー

2 階に大きなベランダを有する洋館は、庭の木々ともマッチしてすばらしい装いである。中に入るとスリッパに履き替えて部屋に案内される。向かって一番右の出窓のある部屋に通されると、先客が 2 人いた。窓際の婦人はすでに紅茶とケーキガ出されていた。もう一人の年配の男性はまだオーダーしたところのようだ。

紅茶をいただいた部屋

ロビーになるのかな

メニューを見て妻はケーキセットにしたが、私はせっかく専門店に来たのでダ

ージリンにした。さすがにダージリンは 650 円で、ケーキセットはブレンドティーで 700 円。でも 100 円追加すると好きな紅茶がオーダーできるとあった。ポットで出される紅茶は 2 杯分あり、カップに注いだあとはポットにカバーの袋をかぶせて保温する。紅茶専門店にくることなどはないので、こうした作法も知らなかった。こんな場所で何も考えることなく、お茶の時間を持つなんて事は考えられなかったことだ。それだけに夫婦 2 人のこの時間は至福の時なんだと思え、うれしかった。

名鉄と JR が街の発展を阻害

再開発が急ピッチで進む知多半田駅前を通り、JR 半田駅に向かう。昔の面影はまったくない、そんな通りを歩き頭のこつかえそうな JR のガードをくぐると半田駅前に出る。

JR 最古の跨線橋

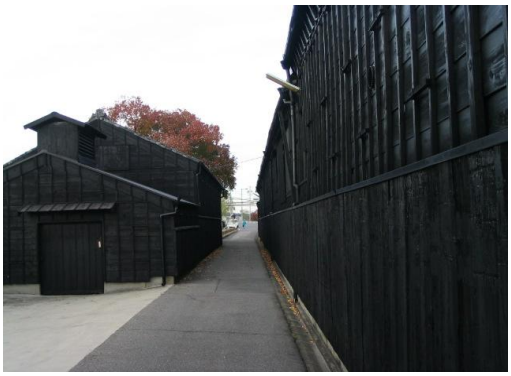
JR 半田駅

ちょうど列車が出発するところだった、その列車の上にある跨線橋は木造として現存する最古の物だという。そんな歴史のある武豊線は東海道線を造るために敷設されたものである。当初は艦砲射撃を受けやすい海岸より、中山道を通る案が決まっていた。しかし、安くできるのと何よりも短期間で出来ることが軍部の意にかなって、海岸沿いの東海道案が決まったという。しかし街の発展の礎となった、武豊線と名鉄の線路が今では街を三分割して、街の発展を妨げているのだから皮肉なものだ。

観光スポットの蔵と運河

半田駅前の大通りを真っ直ぐ半田運河へ向かう。博物館「酢の里」の前まで来ると角にガードマンが立っていた。酢の全国シェア NO1 のミツカン本社が半田市にあることは意外に知られていないが、半田、武豊など知多では昔から醸造業が盛んであった。

パレットが並ぶミツカンの工場


黒い通り

黒い蔵が続く運河沿いの道

博物館前を通らずに右折して、ミツカンの蔵が並ぶ運河沿いの道へ行く。すでに黒い板塀の工場が続く、黒い板塀のところどころに白いミツカンのマークが浮かびあがっている。赤や青色の木製パレットが数多く積まれているのが見える。そして、あの酢の臭いがそこはかとなく漂う。
ここは環境省が選定する日本の「かおり風景百選」に選ばれているのだ。つまり目で見るだけではなく、鼻でもかおりを楽しむことができる散策コースなのである。運河沿いの道路は別に散策用の道も整備されており、安心して風情豊かな景観を楽しむことができる。数人の人が散策路のフェンスにへばりついて何かしている、見ればイルミネーションを取り付けているのだった。これらが点灯するときは、また違う美しさが楽しめることだろう。